



東日本大震災からの復興(いちご編)



いちごは江戸時代末期にオランダから伝来し、明治以降改良されて栽培が盛んになり、いわき市では昭和20年代後半にはすでに露地栽培が行われていました。その後、昭和40年代から水稲の転作物として栽培が本格化し、「いわきいちご」としてブランド化を進めてきた歴史があります。

近年の主な栽培品種は「とちおとめ」ですが、福島県オリジナル品種の「ふくはる香」も作付面積を拡大しており、大型ハウスや高設養液栽培が導入されるなど、平夏井地区を中心に産地形成が進められてきました。東日本大震災の際には14戸120アールが冠水するなど、大きな津波被害を受けてしまいました。生産技術力及び人材育成力の向上を図る復興事業として、「いわき市いちご産地復興協議会」が中心となり、総面積60アールの土地に、土耕栽培用4棟、高設栽培用4棟、育苗6棟の合計14棟を建設しました。

後の夏井地区の産地形成に適する栽培方法を検証すること目的としており、いちご産地再生の呼び水となるモデルケースの確立に取り組んでいます。また、産地の維持形成に必要不可欠な担い手の育成・確保に対応するため、いちごの新規作付者の研修施設としての機能も備えています。



これらの多様な施設は、今

いちごは一般的に親苗から定植苗を増やして栽培しますが、この作業は新規作付者にとって技術的に最も困難な作業の一つになっています。このため、「いわき市いちご産地復興協議会」では、新規作付者が定着しやすい体制づくりの一環として、当該施設を利用した定植苗の大量生産・大量供給を計画しており、平成26年度は約一万四千本の定植苗を供給する準備をすすめています。



復興に向けた夏井地区のいちご産地維持・拡大については今まさに正念場を迎えています。今回ご紹介した施設を拠点に、夏井地区のいちご産地の再生とさらなる発展を期待しています。

(執筆・撮影 渡邊和夫 委員)

トピックス

山田奴の例大祭



いわき市の南部に位置する山田町の下山田地区には、伝統を受け継ぐ山田奴保存会があります。

地元の諏訪・月山両神社の大祭が、多数の地区住民の参加により4月6日に盛大に執り行われました。

七年に一度行われている例大祭は震災後初めて行われ、家内安全、五穀豊穡、地区の繁栄等を願うとともに、山田地区内には双葉地区の仮設住宅もありますことから、一日も早い復興を願い、御神輿が町内を歩き、山田奴おどり、こども薙刀や山田長持唄が奉納されました。

(執筆・撮影 荒川光弘 委員)

農家のための情報誌

全国農業新聞の購読をあなたも

発行・・・毎週金曜日(月4回)
購読料・・・月600円
申込先・・・お近くの農業委員
または農業委員会事務局
電話・・・(22) 7534

編集委員

荒川光弘 草野城太郎
飯高敬一 渡邊和夫 佐川良平

編集後記

今まさに農業委員会だよりの編集作業を行っています。同時並行で農業委員会事務局の一時移転準備を行っています。

農業委員会事務局が入っている市東分庁舎は、今年7月から来年3月まで耐震化工事を行う予定です。4階以下の選挙管理委員会や教育委員会は工事期間中もそのまま業務を行えますが、農業委員会が入っている5階については、工法の関係上一時的に移転する必要があります。

移転準備に伴い執務室の整理を行ったところ、農業委員会だよりの過去の資料などに触れる機会があり、先人たちの足跡に想いを馳せながら、農業委員会だより編集作業の追い込みをかけたと思います。